

「わたくしは自分自身をシンドラーのリストに書き入れた」 —ヒルデ・ベルガーとロゼ・ベルガーの物語り— (Ⅲ)

ラインハルト・ヘッセ* 編著

船尾 日出志** 城田 純平*** 今泉 尚子**** 訳

* フライブルク教育大学元教授

** 名誉教授

*** 人間環境大学助教

**** 早稲田大学大学院生

“Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste” Die Geschichte von Hilde und Rose Berger. (Ⅲ)

Reinhard Hesse*,

Hideshi FUNAO**, Junpei SHIROTA*** and Naoko IMAIZUMI****

*Hauptstrasse 23 CH-8280-Kreuzlingen/Bodensee, Switzerland

**Professor Emeritus of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

***Assistant Professor of University of Human Environments, Okazaki 444-3505, Japan

****Graduate student of Waseda University, Tokyo 169-8050, Japan

序

船尾は友人の哲学者ラインハルト・ヘッセ先生より、2014年9月に1冊の本（“Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste. Die Geschichte von Hilde und Rose Berger” Haland & Wirth im Psychosozial-Verlag, Gießen 2013）をご恵贈いただいた。意外にも哲学書でなく、艱難辛苦のナチス時代をかるうじて生き抜いた2人のユダヤ人女性ヒルデとロゼの半生に関するものであった。そしてその本の大部分は2人の女性自身の回顧録およびインタビュー記録から構成されている。目次は次のようになっている。

導入

ベルトホルト・バイツによる序言

ヘッセ先生による序文

I ヒルデ・ベルガーの物語り

テキスト1「ヒルデ・ベルガーが自身の人生（1914 - 1945）を語る」

テキスト2「マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対話」

テキスト3「ハロルド・ツイリンおよびマリー・ツイリンのヒルデ・ベルガーとの対話」

II ロゼ・ベルガーの物語り

テキスト4「マリー・ツイリンのロゼ・ベルガーとの対話」

テキスト5「クラレンス・マクリモンドのロゼ・ベルガーとの対話」

ヘッセ先生による結語にかわる書簡

テキスト1は原著の21頁～57頁を占めているが、そのうち26頁から41頁までを前報（第2報）で和訳し、発表した。この第3報では41頁から55頁までを和訳し、発表する。1941年から1944年秋までにおけるユダヤ人ヒルデ・ベルガーのさまざまな体験や思いが語られる。特に重要なのは本文では匿名で「X氏」と表記されているベルトホルト・バイツ氏との出会いと交流である。確かにバイツはユダヤ人を助けたし、ヒルデにとっては命の恩人ですらある。しかし事柄はそ

れほど単純ではない。ヒルデの叙述は、わたしたちにさまざまな倫理的ジレンマ問題をつきつけている。それは決して過去の問題でなく、現在の問題でもある。

訳者の3名はすべてヘッセ先生と懇意にする者である。もちろんヘッセ先生及び出版社より日本語への翻訳、および愛教大研究報告における発表の許可をいただいている。《 》は原文にある補足説明であり、【 】内は訳者による補足ないし注釈である。

キーワード：愚かなイエツケ (dumme Jecke), アウシュヴィッツにおける悪夢 (Alptraum in Auschwitz)

I ヒルデ・ベルガーの物語り

1. テキスト1：ヒルデ・ベルガーが自身の人生(1914-1945)について語る

ニューヨーク 1980年11月24日

(承前)

書類を整理したり、あるいは指図をえたりするために、わたくしは常にあるドイツ人のオフィスに出向かねばならなかった。わたくしはそれを、ラジオでニュースを聞ける時間に実行しようとした。わたくしはあたくもラジオに耳を傾けていないように振る舞ったが、ときどきそのようにして、世界で起こっていることを、そして何よりも戦争の状況を知った。わたくしはスピーディーに、そして注意深く働いたので、ドイツ人上司から尊重された。わたくしのドイツ語もまた明らかに他のたいていのユダヤ人よりも良かった。他のユダヤ人たちはみなユダヤ系ポーランド人であって、そしてそのうちの若干の者はオーストリアの大学を修了していたのだが。

ユダヤ人であるわたくしたちはユダヤ地区を離れてはならないとはいえ、ドロホビチチの生活はボリスラフにおけるよりも興味深かった。というのは、人々はあまり田舎的でなかったからである。ポーランド人のインテリだけでなく、ユダヤ人のインテリもまたドロホビチチに居住していた。そしてわたくしは、旅行中の、よき教養を有し、そしてそれどころかドイツ文学について知識がある人々と会うのが好きだった。

もっとも深く、かつもっとも持続する印象を残したのは、作家であるブルーノ・シュルツ (Bruno Schulz, 1892-1942) と知り合えたことであつた。かれは当時ポーランドで知られていただけだったが、しかし間もなくアメリカ合衆国において重要な、世界文学に属する作家として見いだされることになった。シュルツはほぼ完璧なドイツ語を話し、非常に多読で、そしてかれがかれの好きな小説家であるカフカについて、トーマス・マンについて、そしてその他の偉大な作家について語るのを聴くことは、わたくしにとって常に非常に勉強になった。シュルツは画家でもあり、ある学校における絵画の授業でお金を得ていた。

何らかの仕方では、一人のゲシュタポの将校がかれに

ついて話を聞き、そしてゲシュタポのオフィスで絵を制作するように依頼した。明らかにその将校はシュルツの偉大な才能について知っており、そしてシュルツを助けたかったのだ。— そのことは運命的であることが明らかになった。1942年11月にドロホビチチにおいて、ゲシュタポによって組織された一大「駆逐行動」があつた。その際、ユダヤ人地区の何千人というユダヤ人が追い立てて集められ、家畜運搬車で知らない場所に運ばれた。その2日間続く「行動」の間に、多くのユダヤ人が路上で直接的に射殺された。その際ブルーノ・シュルツも射殺されたのだ。

そのとき、「カルパタン石油会社」で働いていたすべてのユダヤ人は夜通しオフィスに留まっていなければならなかった。それ以外では、わたくしたちは身を守ることができなかったのだ。

ドロホビチチにおける大規模行動の後、わたくしはゲシュタポがボリスラフにやってきて、そしてそこで2日間でおよそ5000人のユダヤ人を追い立てて集め、そして運び去ってしまったと聞いた。もちろん、わたくしは両親と妹について大きな不安を持ち、そしてボリスラフへの旅行許可をえようとした。その旅行許可は特別な容認として承認され、そしてわたくしは列車に乗ることを許された。ただし、ボリスラフにおいて石油会社で仕事上の何かを片づけねばならなかった一人のドイツ民間人に伴われて。両親の家に到着したとき、わたくしの胸騒ぎが思い過ごしでないことが明らかになった。すなわち、その家には誰もおらず、ドアにはカンヌキがかけられており、ステッカーが貼られていた。そこには「帝国の財産」と書かれていた。わたくしは警察署に行き、そして家に入ってもよいという許可を願った。しかし警察署員はわたくしに怒鳴りつけた。「ドイツ語が話せるからといって、お前が他の薄汚いユダヤ人よりもマシだなんて思うなよ。次はお前の番だ！」

その後、わたくしはボリスラフの「カルパタン石油会社」の管理者であるX氏《ベルトホルト・バイツ氏のことである。以下同様》のところへ行った。かれは秘書としてのわたくしの能力について聞いており、そしてわたくしをかれのオフィスで使うことができるだろうと語った。かれはまたゲシュタポおよびSSと良い関係をもっているとも述べた。ゲシュタポとSSは

かれらの自動車のためにX氏の引換券を必要だったのだ。X氏はわたくしをかれのオフィスで雇用することに同意するだろうと述べた。かれのオフィスでは、わたくしはかれの特別な保護のもとにおかれ、そしてそれゆえドロホビッチよりも安全であるだろうとも述べた。その同意は実行された。わたくしはボリスラフに戻り、そして強力な管理者であるX氏の非公式な秘書として働いた。

石油会社のために働いていたすべてのユダヤ人は黄色の腕章に“Rüstung”(軍需)を表す“R”を縫いつけねばならなかった。その文字はわたくしたちを将来の「駆逐行動」において、ゲシュタポの恣意的行動から守ってくれるはずであった。

ユダヤ人評議会はその間に、最後の大規模な輸送を追跡しようとしていた。その理由の1つは、自分たちの家族のメンバーが犠牲者たちのなかにいたということであった。ボリスラフにおける地方警察の買収を避けるために、ゲシュタポの「行動」に関する指揮権がドロホビッチから移されていた。ポーランドやウクライナからの放送から、大規模輸送の所在や運命に関して何がしか発見しようとするユダヤ人評議会の数多くの試みにもかかわらず、何も聞きだすことができなかった。数か月後、列車は東方のどこかにある死の収容所に向かったことが知られた。いずれにせよ、生き延びた者はいなかった。

石油会社の長は、わたくしが両親の家に入る許可を得られるように助けてくれた。大きな悲しみと辛い心で、わたくしはすべてをみた。母はちょうど、安息日の食事を支度しようとしていたに違いなかった。後日、わたくしは隠れていた隣人たちから、父と一緒に逃げているとき、何が起こったかという、自分の礼拝用マフラーを身につけ、そして神に祈ったと聞いた。父は隣人たちに、自分は隠れないと語ったのだ。自分は神を信頼し、そして自分の家族は安全であると信じている。というのは、自分は常に神を恐れ、そして律法に忠実であるから。残念ながら父を神は助けなかった。わたくしはいくつかの自分の個人的な所有物を持ち帰った。その後、家は再び封印された。

そのときボリスラフのユダヤ人住民の3分の1以上が消えてしまっていた。今や2、3週間ごとに散発的な「駆逐行動」があった。子どもと老人が犠牲者であった。石油会社で働いていた人々は比較的安全だった。

1942年12月のボリスラフにおける大規模な駆逐以来、犠牲者たちはその都度、強制的に集められ、そしてその場で殺害された。2、3か月後、ますますユダヤ人が減ったので、ユダヤ人地区は消えてしまった。すべての働くユダヤ人は労働収容所に収容された。労働収容所では警察官による監視があり、そしてドロホビッチのSSの命令のもとにあった。労働者の大多数は警察官監視のもとで収容所と労働の場の間を往復

とも行進した。収容所には睡眠のためのホールがあり、そしてすべての同居人のために食事が収容所厨房において調理された。

にもかかわらず、若干の例外はあった。すなわち、わたくしを含むおよそ15ないし20人のユダヤ人は「経済的に価値豊か」であるとみなされた。わたくしたちは収容所の敷地の家に住むことを許された。その家は「白い家」あるいは「ノアの箱舟」とよばれた。もちろん、わたくしたちは他の人々から妬まれた。というのは、わたくしたちは自分の部屋で寝て、そしてわたくし自身で料理を作ることができたので。その間に、ポーランドの他の地域におけるいくつかの労働収容所が、それらはわたくしたちの労働収容所と似ていたのだが、廃止され、そして収容されていた人々は殺されるか、大きな強制収容所に輸送されたという噂がたった。わたくしたちは戦争にとって重要な石油産業のために働いていたとはいえ、決して安全だとは思っていなかった。というのは、わたくしたちはユダヤ人にたいするナチスの政策に理性も論理もないことを知っていたので。

1943年秋、数人のユダヤ人がわたくしたちの収容所から脱出しようとした。2つの可能性があった。ポーランド人あるいはウクライナ人の家に隠れるか、あるいは森に隠れ家を作るか。どちらのやり方とも、多くのお金が必要だし、どちらも現実に安全ではなかった。わたくしたちは、人々が数か月の間、ポーランドで地下室において隠れて行動し、そして思い切って戸外に出ない悲劇的ケースについて知っていた。なぜ以前のように外に行けず、そして遊べないのかを理解していない子どもたちと一緒にだとなおさらであった。さらにお金が無くなると、「主人」はその人たちを冷たく警察に引き渡した。

森で隠れることは、おおいに労働を、大きな骨折りを要し、そしてお金がかかり、そしてリスクがあった。雪や雨から守られねばならない穴を掘らねばならなかった。数か月間の食べ物を買ひ、そして貯蔵するにはお金が必要である。何よりも、隠れ場所から出ていくことが許されない冬のために。というのは足跡が人を明るみに出してしまうからである。何よりも小さな子どもたちを抱える人々が数か月以上にわたって隠れ家で耐えるとき、悲惨なことが起こった。少なからずの人は、隠れ場所の劣悪な衛生状態のゆえに病気になった。食べ物も、水も十分にはなかった。子どもたちは自由を欲し、泣いた。というのは、子どもたちはなぜ地下で生活しなければならないのか、そして他の子どもたちと遊んではいけないのかを理解できなかったから。もちろん警察もまたそのような隠れ家について聞いており、そして捜索犬を用いて探した。1人が発見されると、その隠れ家に住む人たちはその場で「パルチザン」であるとして撃たれた。

あるケースではユダヤ人評議会の代表ゴールドマン博士が襲われた。かれの家族は1942年11月の大規模の「駆逐行動」の期間に見つけ出された。その時代にはより小規模な散発的な行動があった。噂で、わたくしたちは、より小さい収容所あるいはゲッターが整理されたと聞いた。ゴールドマンはそれゆえ冷静さを失い、そして自分の隠れ家に潜むことを決めた。その隠れ家を、かれは大金で購入し、そして十分に食料を備えていた。ある日、管理者X《ボリスラフンの石油会社責任者》[つまりバイツ]は、その地域のドイツ警察の長であるヴュパー（Wüpper）が自慢しているのを聞いたとわたくしに話してくれた。かれの部下たちが隠れ家を発見し、そこにはゴールドマンと2、3人のユダヤ人評議会のメンバーがいて、そして全員がその場で射殺された。

わたくしはその間にXと良いコンタクトをもった。かれはわたくしを事務員として評価しているだけでなく、個人的にも好意をもった。かれはわたくしと「白い家」の他の住人たちを救うために、かれの力のおよぶすべてをすると約束してくれた。Xがわたくしにゴールドマンの騒動について報告してくれたとき、かれはわたくしに、あまり焦って地下に潜らないように警告した。そのかわりに、可能な限り長く収容所に留まり、そしてかれのために働くべきであると。かれは、もし収容所が解散することになったのなら、SSによって情報を提供されるだろうと語った。かれらは「かれのユダヤ人たち」を連れていけないだろう。最終的にそのユダヤ人たちが戦争産業のために必要とされると。Xはそれどころか、わたくしとわたくしの友人、クバに、「時期が来たら」リボルバーを与えると約束してくれた。かれはまた、わたくしへの特別な好意として、クバが、かれは決して「価値豊かな」労働者でないけれども、わたくしと一緒に「白い家」で住めるように配慮してくれた。

Xのわたくしにたいする好意的態度の証明として、次のハプニングを話さないといけない。1943年の夏のある日、わたくしは驚きとともに、自分が妊娠していることを知った。わたくしは当時の状況下では子どもを持ちたくなかったので、墮胎することに決めた。収容所には1人の医者がいたが、産婦人科医ではなかった。かれは「白い家」のわたくしのところに来て、わたくしをテーブルに寝かせ、そして手術をした。その間、友人のクバがランプをもっていた。残念ながら、かれは良い医師ではなかった。血が止められなかった。クバはわたくしの命を心配し、Xのところ走り、そして助けを請うた。Xは本当に心から気遣ってくれ、そして直ちに必要な措置をとってくれた。かれは、部下の一人が自家用車でわたくしをドロホピッチの病院に運ぶよう手配した。その病院では、わたくしはドイツ人として登録され、すぐに救急患者であると扱われ、

そして今度は墮胎が専門家によって、そして成功裏に実施された。そのようにして、Xが事実上わたくしの命を救ったのだ。しかもポーランドで何十万人が殺害されている時代に！

散発的な「駆逐行動」は1943年を通じて続いた。それらは地域のドイツ人警察によって実行された。「R」を縫いつけていない、それゆえ石油産業のために働いていないすべてのユダヤ人はまとめて追いやられ、畜殺場（！）近くの集合ポイントに集められ、そしてその場で射殺された。

それらの「行動」を通じて、わたくしがXに少し影響力をもっていることを証明する機会があった。人々がわたくしのところに来て、そして依頼した。兄弟姉妹あるいは従妹を救ってほしいと。その人たちはお金や装身具を差し出し、それをXに持参してほしいと申し出た。わたくしは決して何かを受けとることはなかったし、そしてXにかれの支援への見返りとして何かを提供することもなかった。わたくしは、助けを求めている人は近い親戚あるいは友人であると言うだけだった。だけどXはその後、集合ポイントに出向き、そして当該の人は工場で役立つと主張した。わたくしは、Xのところに行き、そして助けを請うた唯一の人間ではなかった。「白い家」の他の住民たちもまたXに相談した。違いは、その他の人々がそこから利益を得ていたことであった。

わたくしは、Xが装身具やお金、ドルもまたかれの支援への見返りとして提供され、そしてかれはそれを受けとったことを確かに知っている【そのことをヒルデ・ベルガーは2つないし3つのケースにおいて当該のユダヤ人から、そのユダヤ人たちはバイツに感謝していたのだが、聞いていた。自身が目撃者であったということではなかった。第1報の「ヘッセ先生の序文」参照のこと】。わたくしは「愚かなイエツケ」というあだ名で呼ばれていた《イエツケは東方ユダヤ人からみた典型的なドイツ系ユダヤ人のこと》。というのは、わたくしはお金を受けとらなかったからだ。その論拠は、わたくしが誰かの命を（たとえ短い期間であっても）救ったとき、その貢献に支払わせることは何も誤りではないということ、そしてドイツ人はいずれにせよお金あるいは装身具を得ているということであった。わたくしは、Xを「報償金」の受領ゆえに決して非難しなかったということを告白する。わたくしは、道徳を説くのに適切な時期ではないと考えた。ことに、かれはまさに価値ある何かを実行したのだし、そしてその際かれ自身にとってリスクなことをしたのだから。（戦後、わたくしはかれに、わたくしが考えていたことを話す機会をもった。 - しかしそのことには後で述べる。）

1943年秋、Xは警察におけるかれの数ある仲介のうちのある仲介の後、オフィスにおけるわたくしの小

さな部屋にやって来た。かれは青ざめた顔をして、そしてまったく混乱しているようであり、そしてわたくしに、初めて自分の目で、ユダヤ人が殺されるのを見たと話した。かれは言った。「この戦争が終わったとき、世界はそのような殺人のすべてを知るだろう。誰がその償いをするのか。」かれは当時すでに、ドイツは戦争に勝てない、そしてそのような無意味な殺人のすべてに釈明がなされねばならないことを知っていた。それから、かれは付け加えた。「神のおかげで、わたしは純粋な良心を持っている。わたしは殺人あるいはその他の残忍な行為に関わったことはない。逆に、わたしはユダヤ人を救うために、おおいにリスクをおかした。そして神のおかげで、わたしはあなたやその他の人たちのような証人を有している。」

その瞬間、わたくしは1942年11月におけるかれとの最初の対話のことを考えた。ボリスラフからの大規模なユダヤ人輸送の後で、両親の住居に入る許可を得るために、警察署におけるかれの支援を必要としたことだった。当時かれはわたくしに次のように語った。駅に行った。列車が家畜用貨車に詰め込まれた何千人というユダヤ人を連れて出発しようとしていた。かれは1人の若いユダヤ人女性を救おうとした。かの女にかれの事務所で働くよう依頼することによって。かの女はドイツ語ができたのだ。もしその若い女性がかの女の老いた母親を貨車に戻すことを拒まなかったなら、うまくいきもしただろう。しかしその母親のためには、かなりの影響力をもったXですら何も達成できなかった。かれは、せめて自分だけでも救わないのか、という問いは、かの女からいえば正しくないのだと思った。すぐにわたくしの頭に考えがよぎった。もしわたくしが、わたくしの両親やきょうだいのもとに留まるか、あるいは自分だけが救われるかを決断しなければならなかったら、わたくしはどうするのだろうか。わたくしは告白しなければならない。わたくしは総じて、母親のために犠牲になったあの若い女性ほど英雄的だったという自信はなかったと。率直に言って、わたくしはそのような運命的な決断をする必要がなかったことを喜んでいて！

わたくしはXに、輸送の目的を知っているかどうかを尋ねたとき、かれは最初躊躇し、そしてそれから答えた。働けない人々が行く強制収容所だと考えていると。わたくしは、それによって何が思われ、そして嘆かれているのかを理解した。それに関連して、かれは語った。「我が国は戦争中であること、この時間にも何千人というドイツ人が前線で殺されていること、そしていっそう重要なことだが、何千人という罪のない人々が、そのなかで子どももお年寄りもいるのだが、空爆され、そして死んでいること、そしてドイツのさまざまな都市が破壊されていることを忘れないで。この戦争はわたしたちに国際的な戦争扇動者たちによっ

て、そのなかには国際ユダヤ人会議も含まれるのだが、押しつけられたものである。わたしは、あなたやあなたの両親に責任があるとは思っていない。しかしにもかかわらず、ユダヤ人がここで、アメリカやイギリスのユダヤ人たちがドイツ人に苦悩を加えていることで罰せられるべきであるというのは正しい。でもわたしを誤解しないでほしい。わたしはナチスではない。わたしはナチス党の党员ではない。しかしわたしは、わたしの両親がハンブルクでイギリスとアメリカの爆撃のゆえに耐え忍ばねばならない苦悩について考えてしまう。わたしの両親の命は、あなたの両親の命と同じく危険にさらされている。わたしの両親も同じように無実であり、そして誰も助けてくれない。」

ドイツ人が始めた戦争におけるドイツ人の殺害とユダヤ人であるという唯一の理由からの人々の殺戮の間の相違に関する道徳的ディベートを開始しても意味がないことは、わたくしには明らかであった。そしてわたくしはまた十分に日和見のであった。したがって、わたくしに対して好意を示し、そしておそらくわたくしの命を救ってくれるであろうXのような影響力のある人間を敵に回すことは愚かしいということによく分かっていた。わたくしはそれゆえ何も言わなかった。しかしかれの言葉はわたくしの頭のなかに沁みこみ、そしてわたくしはそれを決して忘れなかった。

わたくしの頭に次のような考えが浮かんだ。Xはそのナチス・イデオロギーを、かれがそれを信じているゆえにすすんで口には出さないのではなく、わたくしを信頼できないので用心してかれの真の意見を率直に言わなかったという考えが。まさしく、それどころかユダヤ人が、自分自身の命を救うために情報提供者になったということは知られていた。

戦後、わたくしはXに、わたくしが実際に考えていたことを知らせる機会をえた。1947年の押しつまったある日、わたくしはすでにストックホルムで暮らしていたのだが、Xから書簡を受け取った。Xはわたくしの住所を、ユダヤ人世界大会を介して知ったのだ。《ここでヒルデ・ベルガーは間違っている。パイツはかの女の住所を、ドイツ赤十字社を介して知った。かれのかの女宛書簡の日付は1947年11月13日、かの女のかれへの返書の日付は1947年12月23日である。》

その最初の書簡で、かれはわたくしが戦争を生き延びたことを嬉しく思っていると、そしてかれも同じく、自身生き続けていることを嬉しく思っていると、そしてかれの妻とかれの子どもたちも生きていと、書いてきた。かれは、ボリスラフ出身の他のユダヤ人生存者を見つけることに成功し、今それらの人々と接触していると、そしてわたくしからの返事をもらえればたいへん嬉しいと、言ってきた。

たとえ短いものではあっても、そこにおいてかれが生き延びたことを祝福した友好的なわたくしの書簡の

後《かの女がベルトホルト・バイツに送った返書は実際は、バイツのものと同様く長文で（タイプライター用紙2枚分）、詳しくて、そして心のこもった誠実なものであった》、2通目の書簡を受け取った。かれは、かれがボリスラフのユダヤ人を助けたことをわたくしが確認する宣誓にかわる説明を送るよう依頼してきた。かれは、わたくしからその種の書簡をえることは、かれにとって大きな意義があると書いていた。たとえかれがすでに、同じくボリスラフにいたクライナーとロゼンベルクから宣誓にかわる保証を得ていたとしても。ともかく、わたくしはベルリン人であり、そして戦争の期間、すべての時間をかれと一緒に仕事をしていたのだから。

その状況と折り合いをつけることは、わたくしにとってかなり難しかった。一方では、わたくしは、かれがわたくしを入院させることで、わたくしの命を救ってくれたことへの感謝を示すべきである。しかし他方ではわたくしは確かに、かれがかれの支援の見返りとして、クライナーやロゼンベルクのようなユダヤ人からお金や贈り物を受け取ったことを知っていた。わたくしはそのことを非道徳的であると思っていた。というのは、かれはその「血の報酬」を必要とするような生活をしていなかったからである。わたくしはその件をいろいろと検討したあと、かれに宣誓にかわる説明を送らないことを決心し、そしてかれ宛に書簡を書いた。その書簡で、わたくしは、なぜかれに「良き態度についての証明」を与えることができないのかを説明した。

返信がきた。そこではかれは次のように書いていた。かれはなるほど失望し、そしてわたくしの態度を理解できないが、しかしわたくしが、わたくしが体験してきたすべての後では明らかに素直な態度をとれず、そしてしたがって、かれが自分にとっての大きなリスクをおかして、どれほど多くを、ユダヤ人を助けるために為したのかを承認することができないのだと考えていると。

1943年の散発的な「行動」の間、「白い家」の住民はいつも不安をもっていた。どこかの警察官がXと警察署長の間の「特別な保護合意」について何も知りえないのではないかと不安を。それゆえ、わたくしたちの1人とXが話し合い、そしてかれに、わたくしたちは不安をもっていると言った。その後、Xはヴェパー中尉と次のことで合意した。それらの行動の間、常に1人の警察官がわたくしたちを守るために「白い家」に駐在することになると。いかなる「過失」も起こらないことを保証するために。

あるとき、ベルリン出身の警察官が配置された。わたくしはかれの世話をするという任務をえた。かれはおおよそ22歳くらいで、そしてわたくしと共にかれの郷土であるベルリン市について語ることができるこ

とを喜んでいた。かれはわたくしに、わたくしのことが好きだ、そしてわたくしに「一目でシンパシー」を感じたと言った。（かれは十分に用心深かった。「一目ぼれした」と言わなかったのである。というのは、ナチスはまさにユダヤ人女性にたいしてそのような感情をもってはいけなかったのだ。）そのほかに、かれはわたくしがかれを悩ませているとも言った。もしわたくしたちの収容所が解散させられ、そしてかれが近くにいたなら、「リボルバーを取り出し、そしてわたくしをその場で撃つ」という特別な好意を示すだろう。そうすればわたくしは長期にわたる苦悩を免れるのだから。かれは、ユダヤ人が殺されることの是非を問うという考えにまったく至らない100%信念のあるナチスであった。

1943年秋に、わたくしたちの強制労働収容所のような収容所がますます多く解散させられるという噂が信じられた。今や、隠れ家を作るのに適切な時点となった。わたくしの問題は、いかにしてそのための、そして食料のためのお金をえることができるのかということである。偶然、わたくしはその時期に事務所でハンガリー人の血をひくポーランド人と知り合いになった。かれの名はメーサーロシュ（Meszarosz）であった。かれはピウスツキ【Józef Piłsudski, 1867-1935年：ポーランド共和国の建国の父にして初代国家元首】の姪だったか、娘だったかと結婚し、そしてボリスラフのポーランド人はかれを高く評価していた。かれは国内軍【Armia Krajowa：第2次世界大戦中のポーランドで活動した、ナチス・ドイツの占領軍に対する抵抗組織である。1939年に編成されたポーランド勝利奉仕団を起源としている。1942年2月には武装闘争連合が形成され、続く2年間ポーランドの他の地下組織を統合し、赤軍がポーランド全土を占領してドイツ軍が排除された1945年1月に解散】の指導者の1人なのだと言った。それは、イングランドの（正規の）ポーランド軍と共に活動した秘密のポーランド軍であった。メーサーロシュは率直に、どんなことでわたくしが困っているのか、そしてかれがわたくしを助けることができるのかどうかを尋ねてきた。わたくしはかれに、隠れ家を作る時がきたと考えているが、しかしお金がないと言った。かれはわたくしに、何も心配しなくていいと言った。かれは、わたくしが多くの人々を、何か見返りなしに助けたことを知っており、わたくしのような誰かは助けられるに値すると言った。翌日、かれからわたくしは1万ズウォティをいただいた。それは、かれが言うには、ポーランド亡命政府からもらったものだったか。かれはわたくしに最大限の秘密厳守を依頼し、そしてわたくしは1万ズウォティの領収書に署名しなければならなかった。もしもっと必要なら、躊躇せずまた自分のところに来なさいとかれは言ってくれた。

それは、少なくともわたくしが覚えている限りでは、ポーランド人がユダヤ人を下心あるいは金銭の請求なしに助けた唯一の例であったことを言わねばならないのは残念だ。

今や、わたくしたちはお金をえたので、友人とわたくしは材料を購入し、そして隠れ家を建て始めることも可能となった。しかし冬が始まり、そして雪が降り始めたので、それはより困難に、そしてよりリスクの多いものとなった。わたくしたちは、地下にあまりにも早く潜伏し、そして森の中で冬じゅう過ごすことに不安をもった。多くの隠れ家が警察によって発見されていたのだ。

さらにわたくしの決断は、いつXがわたくしに警告するのかを気にしていた。残念ながら、Xは1944年春に国防軍に徴兵され、そしてボリスラフを去らねばならなかった。かれは去る前にわたくしに言った。かれのドイツ人従業員の一部によって密告されたのは確実だと思っている。というのは、かれはボリスラフでユダヤ人を助けたからだ。

そのとき、わたくしには、素早く身を隠さねばならないことが明らかになった。何よりも、わたくしたちは、ドイツ国防軍がロシアの戦線で撤退しているということを知っていたゆえにもまた。わたくしたちは、ドイツ人がこの地域から撤退するとき、わたくしたちを生きのまま残していかないだろうと確信していた。残念ながら、わたくしたちは長く待ち過ぎた。わたくしたちの隠れ家は降り積もったばかりの雪のせいで完成していなかった。少なくとも春には身を隠すことができるよう希望していたのに。しかし1944年3月のある日、わたくしたちの収容所は朝5時頃警察によって囲まれた。数人のSS隊員に先導されて、すべての同居者は警察の監視の下で市内を通り抜けて駅まで行進しなければならなかった。若干の若い男子は逃げることができたが、1名ないし2名が撃たれた。しかし残りは家畜のように駅まで歩かねばならず、そして畜殺場へと運ばれる家畜のように貨車に閉じ込められた。貨車には腰をおろすことができる座席はなかった。頻繁な長時間の停車をはさんで1日1夜続いた汽車の移動の間に、わたくしたちは水を飲むことができただけだった。食べ物はいっさいなかった。

翌日、わたくしたちは降ろされ、そして電気の通った鉄条網と監視塔に囲まれた巨大な収容所に運ばれた。わたくしたちはクラカウ近郊のブラショウ強制収容所【ナチス・ドイツが第二次世界大戦中にポーランドのクラクフ(ドイツ名クラカウ)郊外プワシュフ(ドイツ名ブラショウ)に設置した強制収容所。ステューヴン・スピルバーグ監督の映画「シンドラーのリスト」の舞台となった】にいた。およそ2万人のユダヤ人と5千人のポーランド人がここに抑留されていた。数時間、わたくしたちは大きな広場で直立不動の姿勢で

立っていなければならなかった。わたくしを驚かせたのは、ほとんど一人のSS隊員も姿をみせなかったことであった。ユダヤ人のカポ【拘留者の間から腕っ節の強い、ナチスの命令を聞く連中を選んで拘留者グループのボスにした】たちが主導していた。かなりの時間が経ってから、一人のSS隊員が現れて、そして大声で言った。わたくしたちのなかに、ドイツ語とタイプライターと速記ができる者が誰がいるか?と。わたくしが何かを言う前に、大声が響いた。「ヒルデ・ベルガーだ。かの女はボリスラフの責任者Xの秘書だった。」SS隊員はわたくしに前に出るように要求し、そしてそれは真実かと尋ねた。その後、わたくしはかれの後ろを歩かねばならなかった。事務室に入った。そこで、わたくしはデスクワークしている数名のユダヤ人拘留者をみた。わたくしはある部屋に連れていかれた。そこには制服を着たSS隊員が座っていた。親衛隊の特務曹長ミュラーであった。かれは労働動員責任者として労働の分配の権限を有していた。かれはわたくしに何がしかを口述した。それをわたくしはメモし、そしてそれからタイプライターで打った。明らかに、かれはわたくしの仕事に満足していた。そしてわたくしはその事務所で働くことができた。

ボリスラフ出身の人々にとって、ボリスラフから来た誰かを事務所にもつこと、とりわけ労働を配分する事務所にもつことは重要であった。その人たちは、わたくしによって良い仕事を与えられることを希望した。良い仕事は当然、台所仕事あるいは洗濯係であった。しかし男たちにとって、最良の仕事は収容所の外の、つまりクラカウでの仕事であった。そのことは、お金あるいは貴金属などを食糧と交換できるポーランド人と接触する可能性を意味した。食糧はわたくしたちにとって最重要なものであった。というのは収容所では、わたくしたちはごくわずかな、そして粗末な食事しかとれなかったからである。

ブラショウ強制収容所はようやく直前に、解体されたクラカウのゲッソーの遺物として設置された。若干のクラカウのユダヤ人は、お金と宝石を収容所にひそかに持ち込むことに成功した。収容所では温かい着物と丈夫な長靴を買うことができた。その2つともそこで製造されていた。収容所で作製されるすべての物はドイツに輸送された。当然、わたくしは友人のクバに収容所外の仕事をあてがった。その結果クバは、かれが収容所にこっそり持ち込んだお金を食糧品と交換することができた。その貢献から、わたくしたちはその後、何がしかの分け前をもらった。

ユダヤ人のカポたちは通常、SSのようにふるまっていた。わたくしはしばしば、あるカポが女性たちを、かの女たちが秩序正しく列に並んでいないとき、足蹴にしたり、あるいはそれどころか殴打したりするのを目撃した。

わたくしの上司、上級曹長ミュラーは充血した目をもった大柄の、下品な男だった。かれはわたくしと話すとき、わたくしをしっかりとみることがなかった。かれがある労働収容所を解散させたということを聞いたことがある。その労働収容所の若干の生き残りは、その人たちはブラショウに連れてこられたのだが、わたくしに、ミュラーがユダヤ人を、それどころか子どもをかれ自身の手で殺すのを目撃したと話してくれた。

ミュラーはわたくしの名前をよぶことはなかった。わたくしがかれの部屋に入るべきとき、かれは「タイプライター」とだけ叫んだ。もちろんわたくしには、口述の間に座ることは許されなかった。わたくしは起立していなければならなかった。ミュラーは定期的に収容所の労働潜在力についての報告をオラニーンブルク【現在でいえばブランデンブルク州の町】に送らねばならなかった。その町にはすべての強制収容所にとっての、つまりポーランドにおける強制収容所ならびにドイツにおける強制収容所にとっての本部があったのだ。ミュラーはまったく無教養で、かれのドイツ語は劣悪で、そして多くの文体的な誤りがあり、そしてそれどころか文法上の誤りも多数あった。もちろん、わたくしは誤りを修正した。その責任を押しつけられるのではないかという不安をもったからである。しかしかれは変更に気づき、そしてわたくしを怒鳴りつけた。そのように口述してないぞと。そこで、わたくしはかれに穏やかに言った。わたくしはかれの誤りを修正する自由を行使した。というのは、かれは誤った報告を本部に送ることを欲してはいないと確信していたからだ。それでもなお怒鳴るようにして、かれはわたくしに詰問した。何が誤りであるのかを、そもそもわたくしはどうして分かるのかと。わたくしはかれに答えた。「わたくしが生まれ、育ったベルリンの女子高等中学校のドイツ語授業で習ったことから。」わたくしは付け加えた。辞書を参照すれば、わたくしのドイツ語を確認できることを。かれはそのことを実行したにちがいない。というのは、2、3回ほどのその種の騒動の後、かれはわたくしの訂正をもはや問うことはなかったからである。ある日、ミュラーはわたくしを事務所によんだ。そこにはかれの飼犬もいた。その犬を、わたくしは「ロルフさん」と話しかけねばならなかったのだが、ミュラーはわたくしに、今後その犬に毎日30分ブラシをかけるように命じた。それはわたくしにとって特別な特典であった。

1944年夏に2000人を超えるユダヤ人のハンガリーからブラショウへのかなりの大量輸送が行われた。ミュラーはユダヤ人カポたちの助けをえて、人々を選別した。働ける者たちは労働収容所に運ばれた。しかしたいていの人は丘に追いやられ、そしてそこで殺された。わたくしたちは皆、銃声を聞くことができた。後に、わたくしは、ある特別なユダヤ人グループ

が金歯を抜き取り、そして髪の毛を切るという命令を受けとっていたということを耳にした。—金歯も髪の毛もドイツに送られた。それから墓穴が掘られ、遺体が放り込まれ、そして墓穴が再び土で覆われた。続いて、わたくしにミュラーはオラニーンブルクへの報告を口述した。そこではかれは、およそ300人の新しい労働力が収容所に採用され、ほぼ1700人がその場で清算されたとの連絡をしていた。

事務所で働くユダヤ人同居者たちのなかに、ドイツ生まれで、そしてクラカウ出身の青年と結婚した女性がいた。かの女の悲劇的な体験は、わたくしたちのなかの何千という悲劇的な体験の1つだった。しかしわたくしはそれを決して忘れないだろう。かの女はわたくしに、クラカウのゲッターが解体されたとき、何が起こったかを話してくれた。子どもたちが両親から引き離されたこと、かの女は7歳の息子と引き離されるのを最初は拒んだこと。ドイツ人がかの女に、後で会えるといったとき、かの女が折れてしまったこと。もちろん、かの女は息子と決して再会することはないこと。息子を一人にしてしまったことで自分を責めたゆえに、泣かない日は一日も無かったこと。かの女はわたくしに自分の心の内をぶちまけ、そして自分を決して許さないだろうと言った。わたくしが、かの女の自責の念をなだめようとしたあと、かの女から次のように問われた。「あなたを他のすべての人から遠ざけているものって、何なのでしょう？」それを受けて、わたくしはかの女にわたくしの政治的な過去について話した。わたくしはドイツで地下活動をし、そして戦争前には2年半、監獄にいたと。また、わたくしはかの女に説明した。わたくしはわたくしたちを虐待する者たちにたいして違う態度をとっていることを、わたくしは虐待者たちを、一時的な勝利を達成し、そして今かれらの権力を、わたくしたちを絶滅させるために信じられないほど野蛮な仕方でも悪用していることを。にもかかわらず、わたくしは、かれらは決して優勢ではないと考えていた。わたくしは自分がかれらに劣っているとは思っていなかった。わたくしは自分がかれらに勝っていると感じていた。そして、わたくしはかれらを軽蔑していた。

1944年の夏のある日、すべての同居者はいつもより早く起こされ、そして中庭で並んでいなければならなかった。収容所の司令官が演説をおこなった。かれは、3人の拘留者が逃亡を試みて捕らえられ、絞首刑に処せられたことを、そしてわたくしたち全員は絞首台の傍を歩かねばならないことを告げた。そこでわたくしたちへの警告としての遺体をみせるために。

1944年10月末頃、収容所の敷地内に埋められていた遺体を掘り起こすために50名の屈強な男たちが選ばれた。かれらは遺体を焼却するよう命じられた。この恐ろしい出来事は2日間続き、半分腐敗した死体と

焼けた肉の悪臭が収容所に充満し、そしてわたくしたちは体調が悪くなった。

わたくしたちの事務所の近くで、ドイツ人のためにラジオを修理する2人の技術者が働いていた。かれらはヘッドフォンをもって、そしてBBCを聞いていた。遺体の焼却が続いている間、BBCは日に何度も、プラスツォウ強制収容所で何が起きているかを、そしてドイツ人は、収容所が明け渡されることになるゆえに、大量殺戮の痕跡を消去したいのだということを伝えた。

BBCの放送を介して、わたくしたちはクラカウ近くでは東部戦線はすでに消えていることもまた知った。1944年秋にプラスツォウからの撤退が始まった。すべてのタイプライターを打てる人は輸送リストをタイプライターで作成しなければならなかった。輸送は鉄道で、西に向けて、つまりドイツに向けて行われた。

わたくしたちの収容所の敷地外において、クラカウにはおよそ1000人のユダヤ人労働者が働く工場があった。かれらは小さな労働収容所に、つまりプラスツォウのサブ収容所で宿泊させられていた。戦争前は、その工場はあるユダヤ人のものだった。しかし開戦時に没収されたのである。オスカー・シンドラーという名の南ドイツ人が経営者になり、以前のホーロー仕上げの鉄製品のための工場経営を弾薬工場に変更した。

親衛隊の特務曹長ミュラーの事務室で、わたくしは偶然、オラニンプルクから届いた認可をみた。そこには次のように書かれていた。すべての機械および1000のユダヤ人とともにシンドラーの収容所の全体がチェコスロヴァキアのブルニェネツに運ばれるべきであると。

わたくしがブルニェネツへの輸送リストをタイプで作成する前に、数人の親衛隊員がミュラーに、「かれらのユダヤ人」の、つまりかれらが救いたいユダヤ人の名前を載せるように要求した。わたくしはピンときた。そのブルニェネツ輸送は他のどのような輸送よりも生き延びるチャンスがあると。それゆえ、わたくしは自分自身とクバとその他若干の親しい友人を同じくその輸送リストに記入した。

1944年10月末頃、シンドラーの割当量、すなわちおおよそ300人の女性と700人の男性がブルニェネツ行きの貨車に乗せられた。しかし降ろされたとき、わたくしたちは、自分たちがアウシュビッツ・ビルケナオにいることを驚愕とともに知った！わたくしたちは皆、アウシュビッツはもっとも酷い絶滅収容所の一つであると聞いていた。そこではカポたちの大多数はスロバキア系ユダヤ人であった。かれらはわたくしたちをSS（親衛隊）よりももっと悪く取り扱った。わたくしたちは服を脱ぎ、プラスツォフで調達した暖かい着物や良質の長靴を放棄しなければならず、そして身体に合わない、貧弱な夏物の着物と木靴をえた。

わたくしたちは全員、髪を切られた。

わたくしたちが抵抗し、そしてわたくしたちの輸送はオラニンプルクから認可されているということを目指したとき、カポたちは、もしわたくしたちがリストに載っているとしたら、リストにある全員は火葬場に行くだろうと語った。わたくしたちはいかなる希望も諦めた。わたくしたちは自分たちの運命に従うことになった。

わたくしたちは働くことは許されず、そしてバラックのなかに留まらねばならなかった。そのバラックは、わたくしがかつてみたもっとも酷いものであった。夜にはネズミたちがわたくしたちの寝台の上を走ったので、眠ることができなかった。ほぼ毎日、わたくしたちが戸外で立っているとき、警報がなり、そしてわたくしたちはバラックに戻らねばならなかった。というのは新たに貨車に乗せられた人々が到着したからだ。その人々は全員、「サウナ」に運ばれた。そこでは水のかわりに、毒ガスがシャワー口から出てきた。ときどき、わたくしたちは隣接するバラックに収容された人々と話すことができた。それらのなかには、ありうるすべての国籍の人々がいた。ギリシャ人、スロバキア人、ポーランド人。その全員は強制労働者としてドイツにいたが、今やいわゆる「ムスリム」としてアウシュビッツに運ばれてきたのだ。かれらは過酷な労働と劣悪な食事のせいでやつれていて、かれらは皆、火葬場に運ばれた。

わたくしたちがあらゆる希望を捨てていたアウシュビッツでのおよそ4週間の悪夢のあと、シンドラーのグループは呼び集められた。ブルニェネツ・リストのすべての名前が読み上げられた。わたくしたちは鉄道貨車に詰め込まれた。ただし今回はブルニェネツを目指して。そこで、どんなに酷いことが待っているかと、アウシュビッツよりはマシであるだろう。

(この項未完)

(2020年9月18日受理)